

第12回基礎情報学研究会実施報告

2015年3月20日

情報システム学会 基礎情報学研究会 高田信夫

- 1 日時：2015年2月14日（土）14：00～17：00
- 2 場所：コンピュータソフトウェア著作権協会会議室
- 3 参加者：15名
- 4 テーマ：「ネット短詩」の基礎情報学的分析—「マイクロ・ポエトリー」のさまざまな形態をめぐって
- 5 講師：中田（大井）奈美氏（東海大学）
- 6 講演および討議の内容

中田氏から以下のような趣旨の講演があった。

① 情報技術と短詩の問題

従来から、情報技術は俳句の内容に影響を及ぼすことはないと言われてきたが、2006年にツイッターが登場して半年後にアメリカで「6語の回顧録 six-words memoirs」というネット俳句がはやり、ツイッターの普及に大いに貢献した。そしていまなおこのネット俳句はさかんに行われている。

このことから、新しいメディアは俳句の内容に影響を及ぼすのではないか。そしてまた、現代のメディア上の俳句は、我々の認知やコミュニケーションをめぐる現代的な状況をいかに映しだしているのだろうか。

② ポエジーとポイエーシス：基礎情報学と聖なるもの

コンピュータというものが、ユダヤ＝キリスト教の思想をベースにしており、理性に基づく純粋なロゴスの実現をコンセプトにしている。ただし、理想の極端化によってコンピュータの思想が脱肉体化してしまうと、聖性が失われてしまうのではないか。

また、基礎情報学がベースとしているオートポイエーシス理論の「ポイエーシス（創出）」とは、本来は「詩をつくること」という意味であり、「ポエジー」の語源である。そして、ジュール・モヌロの言葉を引用しながら、詩は物質的なものと目に見えない秩序に基づく生成行為とが結ばれ両立するところに宿るものであるから、詩をめぐる考察は、異質なもの同士を結びつけるメディアの作用や聖性について考えることにつながる。

③ 「6語の回顧録」と失敗を人生に位置づけなおすこと

「6 語回顧録」には失恋、死別、夢や希望がかなわなかったという失敗や恥を題材にしているものが多く、次のようなことが考えられる。

- ・ハッシュタグやキャンペーンを介した「祀り」をつうじて、目をそむけてきた人生の失敗に直面する。

→失敗や恥の体験を断続的に「祀り」あげて受け入れることで、その体験が人生に及ぼす影響力を限定していくような、一種の集団的服喪の儀礼として評価することも可能かもしれない。

→ふだんは目を背けている「地」の部分で「囘」にすることで、喪失によって欠けてしまった人生の全体性が回復される契機となっている。

- ・ツイッターというメディアの特質は断断性でなく連続性である。
- ・基礎情報学の情報の三分類（生命情報、社会情報、機械情報）の本質も三つの概念の断断ではなく、連続性の強調にあると評価可能。

④ 各種の「ツイッター俳句」と「偶然短歌」

ツイッター俳句の場合、ジャンルの違いは基本的にはハッシュタグの違いによる自己申告。「柀」または「地」がそのテキストの性質（囘）を決定している。偶然短歌：詩とはまったく関係ない散文（たとえばウィキペディアの一部）が短歌の詩形にのっとなっているといおうだけで、「短歌」として表現されているもの。

→囘と地、つまり散文と韻文の区別を融合させ両立させてしまっていて、地の本質性を垣間見せる実践。

⑤ 結論：「ネット短詩」からふたたび日本の現代俳句へ

ドブレ『イメージの生と死』：魂と肉体の領域を混合させずにはイメージを理解できない。

「ネット短詩」：囘と地という二値的区別による関係性の静態的な提示にとどまらず、二つが両立し区別が反転したり融合したりしてしまうような、矛盾した、生命かつ動態的な関係性が生成され続けること→構成主義的な文学観

日本の現代俳句：海外の「ネット俳句」と同様に、高度に情報化された日本の俳句においても、名詞中心でなく、動詞や形容詞中心に作品傾向がシフトしてきている。

→少なくとも、情報メディアが提示する世界や環境に関わる形式が、作品内容に影響を及ぼし始めていると言えるのではないか。

この講演に対して、以下のような意見が出された。

- ・ツイッターの連続性というのは、現在高校生の間で普及している LINE にも通じるも

のがある。

- 地と図の反転をツイッターの特質といわれると違和感がある。
- 偶然短歌に聖性を感じるというのはどうか。単なる遊びではないか。
- その後、聖性をめぐって活発な議論が交わされた。